

懐疑論とメルロ＝ポンティの「哲学的問いかけ」

著者	重野 豊隆
雑誌名	星薬科大学一般教育論集
号	26
ページ	23-38
発行年	2008
URL	http://id.nii.ac.jp/1240/00000242/

懐疑論とメルロ＝ポンティの 「哲学的問いかけ」

重野豊隆 (星薬科大学 哲学研究室)

Scepticisme et L'interrogation philosophique
chez Merleau-Ponty

SHIGENO Toyotaka (Hoshi University)

はじめに ヒューマニズムと人間の知への懐疑的態度

日本薬学会編「薬学教育モデル・コアカリキュラム」において、「ヒューマニズムを学ぶ（全学年を通して）」という目的が掲げられている。薬学教育においてヒューマニズムの意味をどのように理解しどのような仕方で規定するか、またそれを実際の教育現場にいかにして活かしていくか、そのこと自体それぞれの立場から薬学教育にかかわる者にとって一つの課題であろう。本稿では、西洋思想の歴史の中でさまざまな立場からさまざまに語られてきた「ヒューマニズム」を哲学の立場から、「おのれの知の限界を深く自覚する人間」という観点から明らかにするために、知の有限性を強く意識して成立した懐疑論を巡る議論を考察の中心に据える。

さて、「有限なる人間の一人」という自己理解を持つ医療者は、およそ三つの点で他の医療者および患者との関係において、なんらかのよい影響をもたらすものと考えられる。

第一に、「人間、この死すべきもの」という人間の生の有限性についての認識をまず自己について持つことで、同じ運命にある患者さんへの共感がより適切に生じうるはずである。こうした自己認識によって、患者という弱者への一方

的な同情とは異なる態度を取ることも可能になろう。(有限なる生, 存在論的観点)

第二に、「人間、この知られざるもの」という人間の知の有限性についての認識をまず自己について持つことで、同じく知に限界を持つ他人（他の医療者と患者）とかかわるときにも、自己の見解を絶対化せず、また他人の言動への理解に際しても人間の知の限界を自覚しているがゆえに常に曖昧さや不透明性に耐えつつ、それゆえにまた常に対話への意欲を貫くという態度を維持できるはずである。(有限なる知, 認識論的観点)

第三に、(第二に挙げた人間の知の有限性の否定面を強調すれば,)「人間、この囚われうるもの」という人間の置かれた立場の有限性(硬直性)についての認識をまず持つことで、同じく囚われた者としての他人（他の医療者と患者）との協力が促される。善きことに対する多様な価値観を持つ患者さんとかかわれるためには、自分の価値観の発見や自覚と同時に時にはそれを変革できることも重要である。(多様な価値観, 倫理学的観点)

さて、「おのれの限界を深く自覚する人間」という観点において、おのれの限界を、特におのれの認識能力に対して強く意識し、徹底的に疑問に伏すことを表明する哲学上の立場は一般に「懐疑論」⁽¹⁾と呼ばれている。

ここで、教育現場でよく遭遇する学生たちの意見を一つ紹介してみよう。各学生のレポートやグループによる発表内容においてしばしば表明される典型的意見の一つに、「人間にかかわることについては、人それぞれであって、唯一の正解はない」といった、相対的な主張がある。教員からみて、こうした主張を行う学生たちの意見に対して、無難な結論へと安易に流れており、思考停止という怠惰の嫌疑がかけられることもありえよう。また、こうした主張を行う学生たちの心理的背景として推察されることは、仮に断定的かつ普遍的な主張をした場合、それに対する例外の指摘が教員もしくは他の学生から容易になされ、直ちにその主張の持つ独断の性格が論破されてしまい、その結果、不当に評価が低くされることをあらかじめ回避したいという、一種のリスク管理の心理が働いているかもしれない。だが、思考停止という怠惰や一種のリスク管理の心理の指摘に幾分かの妥当性がありうるにしても、断定的かつ普遍的な主張に

対するこうした相対主義的な反論の表明は、人間社会の現実を強く反映しており、それを表だって言語化しているという点では、一定の評価を与えることもできよう。すなわち、人々の意見はその人が属している時代や社会や教育等の条件に応じて（相対して）、実際異なっており、それら諸条件を超えた普遍的な唯一の真理などまずはありませんはずだ、とこう主張することも、一つの見識であるとも言えよう。

こうした人間の認識能力に関する相対主義的主張は、その相対性がより強く意識され徹底されれば、論理的には懐疑論へと導かれる。すなわち、そもそも人間の物事についての認識が時と場所に応じて変化してやまない限り、人間は例外なく（普遍的に）いかなる真理をも確実に認識することができないはずである、と。とはいえ、懐疑論者は少なくとも問うこと自体を無意味だとしてそれを退けているわけではない。ただ、彼らはその問いが最終的な答えに達することなく、その答えは開かれたままである点をひたすら強調する。

さて、こうした問いと答えを巡る事情は、一見したところ、20世紀中葉に活躍したフランスの現象学的哲学者 M・メルロ＝ポンティ (M. Merleau-Ponty, 1908-1961) の提唱する「問いかけとしての哲学」(La philosophie comme interrogation) もしくは「哲学的問いかけ」(L'interrogation philosophique) と類似しているように思われる。本稿では、人間の知を巡る懐疑論とメルロ＝ポンティの哲学の相違を主題的に取り上げてみることにする。

メルロ＝ポンティは、未刊の著『見えるものと見えざるの』(Le visible et l'invisible)⁽²⁾の本文冒頭で、事物や世界の存在確信をもたらす「知覚の信憑」(la foi perceptive)に関する議論を巡って、ピュロン風の懐疑論の立場を手始めにいくつかの古典的哲学の議論を批判しつつ、彼自身の哲学立場を「問いかけ」(interrogation)として規定している。この「問いかけとしての哲学」もしくは「哲学的問いかけ」の狙いは、さまざまな古典的哲学の議論との対決を通して、「生きられた経験」へと向かう彼自身の現象学的方法を徹底化することにあった⁽³⁾。以下で、メルロ＝ポンティの哲学的立場を一括して「哲学的問いかけ」という表現を用いて表すことにする。

本稿で示そうとする具体的な論点とは、次の点にある。

第一の論点は、相対主義・懐疑論・不可知論は、その思考過程において論理的にいかなる点で異なっているのかを明らかにすることである。というのも、「懐疑論」と一口に言っても、それには哲学の歴史上さまざまな変容態もしくは派生態があり、少なくとも論理的には一定の区別をして論を進めることが、その後の本稿の展開をより明確にするための予備的考察として有効だからである。

第二の論点は、「ピュロン風の懐疑論」が、普遍的にあらゆる知に対して、すなわちわれわれの持つすべての知の起源および存在確信をもたらす知に対してなされるべきもののだとしたら、果たして「ピュロン風の懐疑論」は「世界に対する知覚の信憑」に対してどこまでおのれの懐疑という立場を徹底できているかにある。この論点との関連から、メルロ＝ポンティの哲学的立場である「哲学的問いかけ」との相違を素描することができる。

第三の論点は、「デカルトの方法的懐疑」もまた別の意味で不徹底ではないか、という問いである。すなわち彼による懐疑の成果がその遂行過程において、「知覚の信憑」がもたらす知の内容に動機づけられ、むしろ「知覚の信憑」を前提にして初めて成り立っているのではないか、という論点である。この論点との関連から、メルロ＝ポンティの哲学的立場である「哲学的問いかけ」の特徴も明らかになる。

第四の論点は、モンテーニュが、論理的に懐疑論の徹底から導き出された「徹底的懐疑論」の立場だとしたら、はたして「モンテーニュ風の懐疑論」は「世界に対する知覚の信憑」に対してまでも懐疑（判断停止）の立場を取りうるか、という問いである。

最後に、メルロ＝ポンティが提唱する「モンテーニュ風の懐疑論」が科学と宗教に対してどのように位置づけられるか、その若干の見通しについて、一言だけ触れておきたい。

註

- (1) 「懐疑論」(scepticisme) とは、たとえば, Dictionnaire de la langue philosophique P.U.F., 1969, によれば, 「何物も確実なものとして肯定しない教

説のこと」である。

- (2) メルロ＝ポンティ著『見えるものと見えざるの』(Le visible et l'invisible, Gallimard, 1964)からの引用に際しては、本書の略語「V・I」の後に原典のページ数のみ記し、訳文に関しては、本稿の地の文章との兼ね合いで一部改変した箇所を除き、中島盛夫監訳、法政大学出版局、1994年に従った。
- (3) メルロ＝ポンティによる「古典的反省哲学」への批判については、拙論「メルロ＝ポンティの問いかけとしての哲学」東洋大学文学部紀要第40集、1987年、pp.136-139参照のこと。

一 相対主義、懐疑論、不可知論

相対主義、懐疑論、不可知論は、その思想史上さまざまなニュアンスを伴って語られてきた。本稿では、三者の相違をあえて際立たせるために、細かなニュアンスを捨象し、その思考過程において論理的にいかなる意味で異なっているのかに論点を絞り、独自の仕方では三者を規定した。そのためには、たとえば、それぞれの語の対比語との連関で整理することが有効である⁽¹⁾。

「相対主義」とは、「いかなる認識も相対的であるとする教説」である。ただし、あくまで認識の相対性を主張するにとどまり、確実な認識に関して、その可能性までも全面的に否定するところまでは主張しない。「相対」という語は、「絶対」という語との対比によって、二重の意味で規定することができる。

第一に、「……から解放され、……から独立の」という「絶対」の本来の語義との対比から、「相対」という語は、「他のものと関係がある、ないしは他のものとの関係によって成り立つもの」という意味を持つ。この意味では、物事はそれ自体において知ることができるわけではなく、単にわれわれ人間にとってのみ、われわれとの関係においてのみどのように見られるかという点において、知ることができる。

第二に、「完成する、ないしは完了する」という「絶対」の派生的な語義との対比から、「相対」という語は、「完成の域にまで達しえないもの」という意味

を持つ。この意味では、事物の認識は、不完全なものであり、したがって、われわれ人間は物事の本質を完全には知ることにはできない。

ただし、仮に相対主義者が「認識の相対性」というおのれの立場に踏みとどまることなく、それを一歩踏み越えておのれの主張の妥当性そのものを根拠づけようとするや否や、ある難点（内的矛盾）に陥ってしまう。すなわち、相対主義者が「認識の相対性」が及ぶ範囲をおのれの主張にまで拡張して、もし「およそすべての認識が相対的である」と絶対的に断言するならば、少なくとも彼はこの断言そのものは絶対的なものとして例外的に主張していることになり、「認識の相対性」という立場をすでに踏み外していることになるからである。相対主義者がおのれに対してあくまで忠実な態度をとるならば、おのれの主張に対しても認識の相対性にとどまらなければならない。

それに対して、「懐疑論」とは、上述の「相対主義」がおのれの立場を意図的に踏み越えて、「確実な認識を断固として否定する立場」へと変容したものと見なすことができる。「懐疑論」とは、人間の知的能力一般に対する懐疑の立場である。ただし、あくまで認識の相対性にとどまる相対主義とは異なり、「……について知ることができない」と断言することにその特徴がある。「懐疑論」は、まず「独断論」との対比によって、次におのれの主張への忠実度に応じて、次のように規定することができる。

第一に、「独断論」が「人間の知的能力によって、確実な真理を知ることができる」とする教説であることとの対比において、「懐疑論」とは、「人間の知的能力によってはいかなる真理も確実に知ることができない」とする教説」とすることができる。この知的態度は例外なくあらゆるものに向けられているならば、「普遍的懐疑論」と呼ぶことができる。

第二に、「懐疑論」がいかなる独断をも回避するというおのれの主張にあくまで忠実であるならば、何事も断言せず、定義すら差し控える「判断停止の態度」を意味する。というのは、もし仮に普遍的懐疑論者がおのれの主張を断固として（独断的に）主張するならば、論理的には容易に独断論へと陥ってしまう。すなわち、「人間は例外なく（普遍的に）いかなる真理も確実に認識することができない」という主張自体には一切の懐疑の目を向けられることなく、独断的

におのれの断言的主張（真理）に到達することだけは前提にしているからである。すなわち、「懐疑論」を公言する限り、人は必ずや「独断論」に陥ることになる。

普遍的懐疑論者が独断論に陥ることを防ぐには、何事も断言しないように心掛け、ことごとく「判断停止の態度」を貫くことが必要である。これを「徹底的懐疑論」と呼ぶことができる。

これらに対して、「不可知論」とは、「われわれ人間が知りうるものは、事物の単なる現れにすぎず、その背後にある実在の真の姿は認識することができず、したがって、われわれは経験を越えて立てられるすべての問題を拒否しなければならないとする立場」である。「懐疑論」との相違は次の通りである。

第一に、「懐疑論」が普遍的な認識の成立を否定し、断定的な態度を保留するのに対して、「不可知論」は、何らかの意味で実在とその現れである仮象とを区別し、実在は認識の対象ではあえず、認識を専ら経験的な事実の範囲に限ろうとする。

第二に、「懐疑論」がいかなる断定的な態度をも保留するのに対して、「不可知論」は実在の認識不可能性を断固として主張することによって、かえって、その実在の存在それ自体を何らかの意味で想定（もしくは示唆）しようとする立場である。

以上が予備的考察である。

註

- (1) 相対主義・懐疑論・不可知論の相違については、Dictionnaire de la langue philosophique P.U.F., 1969, および、P・フルキエ著『哲学講義 2 認識 II』筑摩書房、1976 年、「第 15 章 真理」を参照した。特に、相対主義については、アンネマリー・ピーパー著『倫理学入門』文化書房博文社、1997 年、「第一章倫理学の課題 四、相対主義による論難」を参照した。さらに、「不可知論」については、『現代哲学事典』講談社現代新書、1970 年、「不可知論」の項目、および『哲学辞典』平凡社、1981 年、「不可知論」の項目などを参照した。

二 ピュロン風の懐疑論と「哲学的問いかけ」

メルロ＝ポンティにとって、懐疑論の議論を検討する狙いとは、次の点にある。

「われわれにとって重要なことは、まさしく世界の存在意味を知ることである。この際、われわれはこれに関して何も前提すべきではない。それゆえ、存在自体という観念も、それと相関的な、表象の存在、意識としての存在、人間にとっての存在という観念も、前提してはならない。それというのも、われわれの世界経験に関して改めて考え直さねばならないのは、世界の存在と同時に、以上のすべての諸概念だからである。いかなる存在論的偏見にも捉われずに、そしてまさに世界—存在、物—存在、想像的存在ならびに意識的存在とは何かを知るためにこそ、懐疑論的諸論拠を定式化し直さねばならない。」(V・I, p. 18)

メルロ＝ポンティは、この箇所的前後で、「懐疑論」を言い表す立場として「ピュロン主義」(pyrrhonisme)なる言葉を使用している。だが、古代の懐疑論者であるピュロンの主張をそのテキストを引用しながらそれに沿って厳密に解釈するというやり方をここではとってはいない。すなわち、この言葉は「懐疑主義」(scepticisme)の一般的な別称として使用され、両者は厳密に区別されて使用されてはいない。したがって、本稿においては、両者の意味を含み持たせた「ピュロン風の懐疑論」という表現を用いていくことにする。

上記引用箇所の「さまざまな存在」に関する概念に関して、そのそれぞれがいかにして「知覚の信憑」⁽¹⁾を前提にし、かつまたそれから汲み取られて成立したのか、もしくはそれを変容させて成立したものか、また逆に、いかにしてそれを看過し、問いとして立てられることなく素通りしてしまうことが可能であったのか、これらの事情を『見えるものと見えざるもの』に沿って、次に考察する。

メルロ＝ポンティによる批判相手の議論過程への考察内容は、必ずしも判明ではない。というのは、それはメルロ＝ポンティにおいて批判相手の内的論理を忠実にあくまでたどるという作業と、相手への外部からの批判的な言明とが、常に渾然一体となっていて、両者が論述上明確に区別されてはいないことが多々あるという、メルロ＝ポンティ独特の論述スタイルによる。メルロ＝ポンティはまずおのれの立場を明確にした上で、他の哲学的立場をいわば外から批判するというやり方は採らない。相手の議論過程に忠実にあくまでつき従って、時には相手以上にそれを徹底してみせるという仕方、いわば間接的におのれの立場を徐々に明らかにしていくという、論述スタイルをとる。（それは、「哲学的問いかけ」の知の在り方と無縁ではない。）ピュロン風の懷疑論に対しても同様である。

メルロ＝ポンティによれば、ピュロン風の懷疑論者の行う議論過程においては、すでに「見える世界への知覚の信憑」から由来した知が前提にされ、それを使用し暗黙のうちにそれに訴えかけている。それをあえて、再構成すれば、およそ次のようになる。

まず、ごくありふれた日常経験の記述から考察を開始する。私はいま目の前の事物、たとえばテーブルを見ていることは、確実である。また、このテーブルが私の視覚の働きをつなぎとめていることも、確実である。その上、テーブルに座っている私の想いが、想像上のある橋にまで達しうることも、確実である。ついには、私は実際に見えているものや想像しているもののすべての地平において、世界そのものに臨んでいることも、確実である。（ここまでは、フッサールの用語をあえて用いて述べれば、自然的態度をとる人間の知覚経験や世界の素朴な明証性を表しているといえる。）

しかしながら、懷疑論者はここから「見える世界への知覚の信憑」のもたらす知に対して表だった反論を開始する。すなわち、これらの確実さをもたらす視覚作用そのものへと懷疑の目を向け、「この視覚作用はあくまで私のものにすぎないのではないか」という、相対主義的疑念を提起する。すなわち「そうした知は私的な見解、私の単なる思い込みに過ぎないのではないか」という反論である。

ところが、メルロ＝ポンティによれば、ピュロン風の懐疑論者は、実はすでに「おのれが揺るがすかにみえる世界へのかの信憑を使用している」(V・I, p. 19) ののである。すなわち、ピュロン風の懐疑論者は、「世界への知覚の信憑」から汲み取った経験知を暗黙のうちに利用して、おのれの議論を組み立てているはずである。なぜならば、ピュロン風の懐疑論者がわれわれの見ているものが偽ではないかと疑念を提起する限り、少なくとも彼は偽なるものを真なるものから区別する何らかの経験知をすでに持っていたはずであり、こうした真なるものの経験知は、「世界への知覚の信憑」から獲得しているからにほかならないからである。こうして、ピュロン風の懐疑論者は、実はおのれの懐疑の立場を踏み越え、「真なるもの自体」および「世界一般」を要請している、とこうメルロ＝ポンティは批判する。

その上、懐疑論者が知覚を想像や夢と同様に、疑わしいものであると主張する場合、彼はわれわれにとって絶対に認識不可能な「存在それ自体なるもの」をあらかじめ想定した上で、議論を展開しているともいえる。ここに、「不可知論」の立場を見て取ることができる。すなわち、「存在それ自体なるもの」と相關的に、われわれ自身にのみ知られている存在領域として「意識の諸状態たる内的生」を想定する。こうして、あらゆる知(表象)は、どちらかの領域に属することになる。また、こうした二元論的発想は、「デカルト的方法的懐疑」を支えている前提でもある。

このように、一切の確信を破壊しようとする懐疑は、それ自身のなかにいまだ疑われていない諸前提が潜んでいるという意味で、「ピュロン風の懐疑論」は徹底化されてはいなかった。以上が、メルロ＝ポンティによる「ピュロン風の懐疑論」批判の骨子である。

註

- (1) 「知覚の信憑」における「信憑」の意味とは、メルロ＝ポンティによれば、「……を決定するという意味における信念 foi ではなく、いかなる措置にも先立つものという意味における信憑 foi のこと」(V・I, p. 12) である。その具体的な意味については、拙論「メルロ＝ポンティにおける存在

論的探究」東洋大学紀要教養課程編第 29 号, 1990, 3.20, pp. 38- 40 参照のこと。

三 デカルトの方法的懐疑と「哲学的問いかけ」

デカルトは、「ピュロン風の懐疑論」へと陥ることなく確実な認識に達するために、懐疑という方法を遂行し、この懐疑を通り抜けた認識のみを確実なものとして確立しようとする。次に、デカルトが試みた「方法的懐疑」へのメルロ＝ポンティによる批判的作業に沿って、「哲学的問いかけ」の特徴を考察する。

メルロ＝ポンティによれば、「デカルトの方法的懐疑」とは、ピュロン風の懐疑論で明らかになったことと関連づければ、「存在それ自体」と「われわれの意識状態」という二元論的な存在領域の間で浮遊しつつ未決定のままとどまることを回避するため、懐疑の到達点として「思惟」という一元的存在領域へとすべての問題を還元しようとする企てと見なされる。

まず、メルロ＝ポンティもデカルトも、「ピュロン風の懐疑論」と同様、ごくありふれた日常経験の記述から考察を開始する。すなわち、一方では、私は目の前の事物、たとえばテーブルを見ていることは、確実である。これは、「知覚の信憑」における知覚の内実がもたらす確信である。また他方では、私が見ていること自体へと懐疑を向けそれを言い表そうとし、その結果、このテーブルという事物の存在への懐疑にも言表しうることも、また確実である。すなわち、自然的態度をとる人間の知覚経験や世界の素朴な明証性が成立すると同時に、それを吟味し言い表そうとすると、たちまちその確信が揺らぎ始めることも確かである。

こうした存在確信と同時に、それへの懐疑の可能性という逆説を解消するために、もしくは逆説の両契機が統合すべきような第三の次元へと、すなわち「思惟」の次元へと移行しようとする試みが、「デカルトの方法的懐疑」である。メルロ＝ポンティからみて、その思考の議論過程を再構成すれば、およそ次のようになる。

まず、デカルトは、意識の内在性という意味での「思惟」だけが、唯一確実

さを樹立できる領域であることを前提とする。その上で、懷疑の遂行を経て確實性を樹立するには、懷疑を最終的には「思惟」の領域にまで至るように持っていくことが必要である。

ところが、デカルトにとっては、感覚されたもの、想像されたもの、夢といったものは、「思惟」されたものの領域には元来属さないものであるから、それらにそのまま確實性を認めることはできない。

そこで、たとえば感覚されたものについて、判断を停止することによって、あらかじめ誤謬の可能性をすべて排除しておく。ここまでは、「普遍的懷疑論」の立場であるとも言えよう。ただし、誤謬可能性のあるすべてのものを意識の内在的領域である「思惟」の領域からあらかじめ排除しておく点が異なっている。そうした上で、「感覚することそれ自体」を「感覚することの思惟」へと移行させ、「思惟」の次元にまで至って初めて確實性が樹立しうるように、いわば「仕掛けて」おくのである。

このように、デカルトの懷疑の遂行過程中には、あらかじめ潜ませておいた「一種の仕掛け」が準備されていると見なすのが、メルロ＝ポンティの「デカルトの方法的懷疑」に対する批判である。ここで、メルロ＝ポンティによる解釈において決定的なことは、デカルトにおいては、「感覚することの思惟が確固たるものと見なされるのは、ただ思惟が存在するものについて何の予断も下していないからであって、思惟されたものが思惟のうちに現れるということに自ら制限しているからである」。(V・I, p. 68) という点にある。

デカルトは、「知覚の信憑」において表明されている事物の存在確信と、その存在確信への懷疑の可能性とをともに認め、その上で、意図的に（方法的に）、「知覚の信憑」から後退しているともいえよう。デカルトは、存在確信とそれへの懷疑とが相矛盾するものだと始めから想定していたがために、両者が相矛盾なく並存しうる「思惟」の内面的確實性の次元への移行する道をたどったのである。彼はこうして、第三の次元である「思惟」の次元へと移行する。

以上が、「デカルトの方法的懷疑」が懷疑として不徹底であること、ならびに「デカルトの方法的懷疑」すらも「知覚の信憑」を全面的に否定しているわけではなく、かえってそれに動機づけられているとする、メルロ＝ポンティのデカ

ルト批判の骨子である。この意味で、「知覚の信憑とは、懐疑の可能性なのである」(V・I, p. 68)といえる。

それに対して、メルロ＝ポンティの「哲学的問いかけ」の狙いは、「知覚の信憑」が表明している逆説を、そのまま解消（もしくは解体）することなく了解へともたらそうとする試みである。

四 モンテーニュ風の懐疑論と「哲学的問いかけ」

普遍的懐疑論者が「いかなる真理も確実に認識することができない」という理由から、恒常的な判断停止、すなわち「徹底的懐疑論」であり続けるならば、そこからモンテーニュの「我、何をか知るや」といった疑問形で表される懐疑論へと転換するためには、その思考過程からどこへと向かって半歩進め（逸脱し）なければならないのだろうか。

メルロ＝ポンティの論文集『シーニュ (Signes)』⁽¹⁾、の中にモンテーニュの懐疑論を主題的に論じた「モンテーニュを読む (Lecture de Montaigne)」という論考がある。モンテーニュに関するメルロ＝ポンティの次の引用文が、モンテーニュが「懐疑論」の思惟過程からどのように半歩を進めたかのゆえんを言い表している。

「人間的知に対する批判はもし人が完全無欠もしくは絶対的知の観念に固執するのでない限り、それを破壊させたりはしない。もし反対に人間的知に対する批判が絶対的知の観念をわれわれから取り除くとすれば、その時人間的知は唯一の可能なものとなり、あらゆるものの尺度となって、ひとつの絶対匹敵するものとなろう。」(S., p. 261)

モンテーニュは、「絶対的知」という観念にも、おそらくはそれと対比をなす「相対的知」という観念にも捕らわれず、両者から解放されて「人間的知」を理解する道をひたすら模索した。モンテーニュは、おのれに問いながら、答えを出すことはしなかった。さらに、何一つとして知らないということすら認める

ことを拒否して、「我、何をか知るや」という徹底した判断停止の態度を反問形式で言い表していた。知に対するこうした徹底的な懐疑は、さしあたりは何らかの二元論の一種を前提とした「不可知論」と見なすこともできよう。だが、より厳密には、モンテーニュの懐疑は、「絶対的知」という観念と「相対的知」という観念との区別それ自体にまで及んでおり、こうした区別そのものに対する懐疑である。さらには、現れと実在との区別をあくまで維持する「不可知論」とも異なり、この区別そのものに対しても判断停止するという「徹底的懐疑論」にも通じている。モンテーニュのこうした知に対する態度を、本稿では一括して、「モンテーニュ風の懐疑論」と呼ぶことにする。

メルロ＝ポンティによれば、「モンテーニュ風の懐疑論」には、真偽論に関して、二つの面がある。「一方で、何一つとして真実ではないとしながら、他方で何一つとして虚偽ではないということを同時に意味している。」(S., p. 250) すなわち、彼の「懐疑論」は、一貫して、「真」と「偽」とを区別する知そのものへの、また相対立する「絶対」と「相対」とを区別する知そのものへの徹底した懐疑であり、「一切の意見や一切の行為を根拠のないものとして退け、まさにそのことによって、これらを虚偽のものとして同時に退ける手段をわれわれから奪うのである。」(S., p. 250) すなわち、「不可知論」が前提としている二元論的枠組みそのものへの懐疑ですらあるのである。

ただし、見逃してはならないことは、モンテーニュの懐疑遂行の思考過程にも「一つの全体的真理の観念が暗示される」(S., p. 261) というメルロ＝ポンティの指摘があることである。また、「確信は懐疑から出てくる。それどころかその懐疑そのものが確信としての正体を顕わにしてくる。したがって、その懐疑の範囲を測る必要がある。」(S., p. 261) というメルロ＝ポンティの指摘からも、モンテーニュにおいては懐疑と確信とのかかわりも密接に認められる。だとすれば、「一つの全体的真理の観念」こそ、モンテーニュが実は「世界への知覚の信憑」から汲み取りそこから由来している観念(知)であると敷衍して解釈することも可能であろう。

われわれは、「モンテーニュ風の懐疑論」にこそ、メルロ＝ポンティの「哲学的問いかけ」に最も類縁した立場を見て取ることができる。というのは、先の

本稿「二 ピュロン風の懐疑論と哲学的問いかけ」の冒頭で「懐疑論の議論を検討する狙い」として示した引用文「存在自体という観念も、それと相関的な、表象の存在、意識にとっての存在、人間にとっての存在という観念も、前提してはならない。」(V・I, p. 18) とするメルロ＝ポンティの立場と重なるからである。

註

- (1) メルロ＝ポンティ著『シーニュ』(Signes, Gallimard, 1960)からの引用に際しては、書名の略語「S」の後に原典のページ数のみ記し、訳文に関しては、本稿の地の文章との兼ね合いで一部改変した箇所を除き、木田・滝浦(監訳)、みすず書房、1976年に従った。

結語として 一つの哲学的ヒューマニズムの試み

最後に、以上を踏まえて、今後の課題についてひとこと触れることが許されるところとしたら、次のように言うことができよう。

「おのれの限界を深く自覚する人間」という観点において、おのれの限界を、特におのれの認識能力に対して強く意識し、徹底的に疑問に伏すことを表明する哲学上の立場が「懐疑論」であった。もし人間的知に徹するモンテーニュの中に一つのヒューマニズムの典型を見出すこともできるとすれば、それは、科学的知や宗教的信に対して、どのような在り方をするものなのであろうか。メルロ＝ポンティがモンテーニュに関して次のように述べている文章が示唆を与えてくれる。

「ひとつの形而上学なり自然学なりが提供しうる人間に関する説明を、彼は、前もって忌避する。なぜならば、哲学や科学を説明するのはやはり人間なのであり、人間がそれらによって説明されるというよりは、それらが人間によって説明されるからである。……人間に関する問題を解決することは課題足りえず、もっぱら人間を問いとして描くことのみが課題た

りうるあの発見なき探究、獲物なき狩猟の観念はそこから生ずるのである。」(S., p. 255)

「自然らしさ、素朴、無知を再び見出すこと、それは根本的確信という恩寵をそれを取り巻いて眼に見えるようにする懷疑の中に再発見すること」(S., p. 255)

メルロ＝ポンティがモンテーニュとの類似点を見出そうとした「哲学的問いかけ」とは、科学的知にも、恩寵という信にも距離を保ちつつ、あくまで有限なる人間的知に徹した知的態度の遂行を目指したものであろう。

【参考書誌】

M. Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, Gallimard, 1964 (メルロ＝ポンティ著『見えるものと見えざるの』中島盛夫(監訳)、法政大学出版局、1994年)

M. Merleau-Ponty, *Signes*, Gallimard, 1960 (メルロ＝ポンティ著『シーニュ 2』木田・滝浦(監訳)、みすず書房、1976年)

Dictionnaire de la langue philosophique P.U.F., 1969

P・フルキエ著『哲学講義2 認識II』筑摩書房、1976年

アンネマリー・ピーパー著『倫理学入門』文化書房博文社、1997年

『現代哲学事典』講談社現代新書、1970年

『哲学辞典』平凡社、1981年

バーナード・フリン「メルロ＝ポンティと懐疑論の哲学的立場」(メルロ＝ポンティ著『「フッサールの幾何学の起源」講義』加賀野井秀一・伊藤泰雄・本郷 均(訳)、法政大学出版局、2005年)